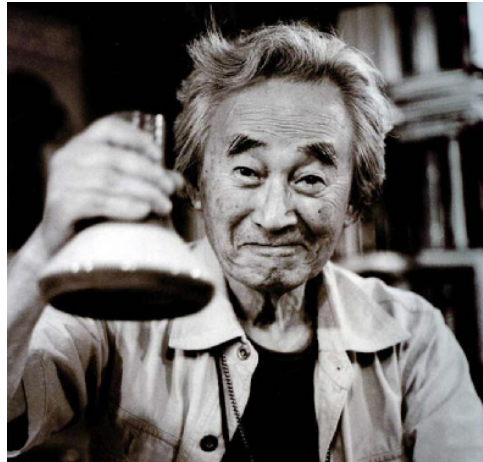


柳

SORI
YANAGI

宗

理



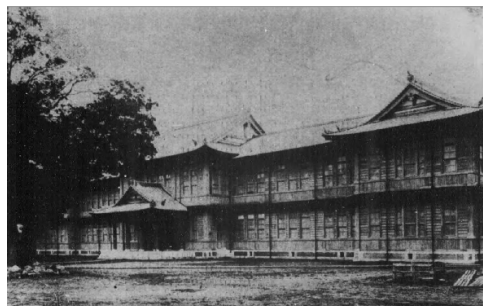
柳 宗理

工業化に伴い、大量生産の製品が生活に浸透してきたことで、「手仕事」の文化が失われてしまうことを恐れ、近代化＝西洋化の流れに警告を促し、物質的な豊かさだけでなく、より良い生活とは何かを追及した。これを民藝運動と言い、柳宗悦は民藝運動の父と呼ばれ、「美とは何か」、「美はどこから生まれてくるのか」を生涯追求し続け、1957年には文化功労賞を受賞した。

柳宗理は1915年に原宿で生まれたインダストリアルデザイナーである。
父の柳宗悦は文学同人誌「白樺」を中心にした文芸思潮の活動をしていた白樺派の1人である。白樺派の作家たちは軍人嫌いで、武士像や明治の精神への反発しており、ゴッホやセザンヌなどの西洋芸術の影響も受けていた。また、柳宗悦は名もなき職人の手から生み出された日常生活の道具を「民藝（民衆的工芸）」と名付けた。美術品に負けない美しさがある、美は生活の中にあると考えた。各地には生活に根付いた民藝があり、使用方法に合った「健全な美」があり、新しい「美の見方」と「美の価値観」を提示した。



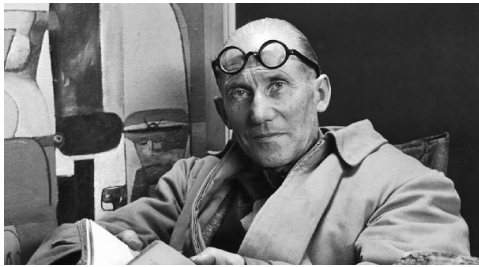
柳 宗悦



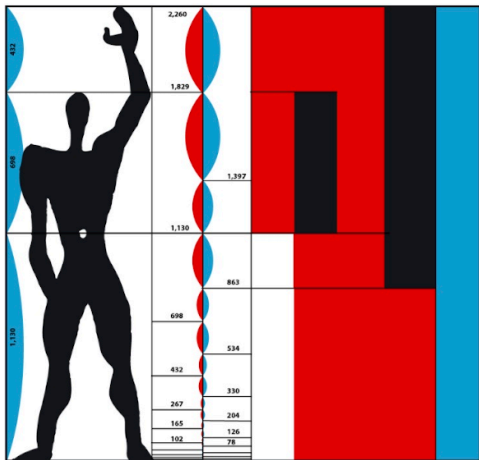
東京美術学校

柳宗理は東京美術学校（現在は東京藝術大学）に入学し、水谷武彦に出会った。
水谷武彦は美術教育者、建築教育者であり、日本で初めてデッサウのパウハウスに入学した人である。パウハウスとは、工芸や写真、デザインなどの美術と建築に関する教育を行った学校で、合理主義的、機能主義的な芸術を指すこともある。無駄な装飾を無くし、合理性を追求するモダニズムの源流となった機関で、現代社会の「モダン」製品デザインの基礎となっている。水谷武彦の講義で柳宗理はル・コルビュジエを知り、デザインに興味を持った。

ル・コルビュジエ

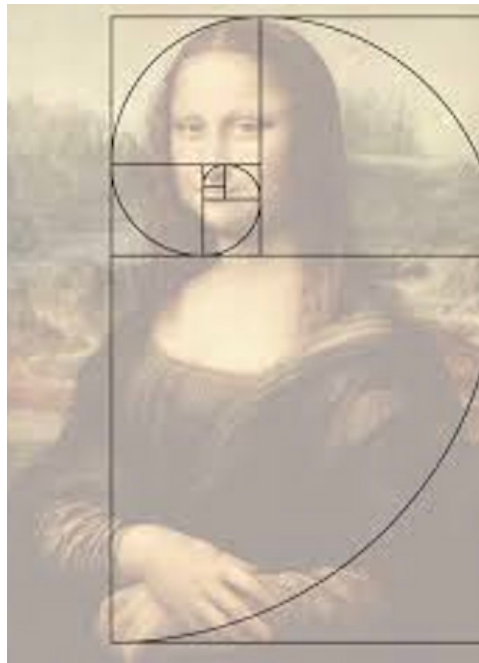


ル・コルビュジエは文字盤職人の父とピアノ教師の母との間に生まれた、スイス、フランスの建築家だ。弱視のため家業を継ぐことができず画家を目指し美術学校に入学し、校長に才能を見出され建築の道へ進んだ。



「モデュロール」は人が立って片手を挙げた時の指先までの高さを黄金比で割り込んでいくという方式である。

世界文化遺産にも登録された「サヴォア邸」は、ル・コルビュジエの代表作である。「サヴォア邸」には「近代建築の5原則」を用いており、それまでの伝統的な建築の概念を悉く破壊するものであった。「近代建築の5原則」とは、「ピロティ」、「自由な平面」、「自由な立面」、「独立骨組みによる水平連続窓」、「屋上庭園」である。



ル・コルビュジエは幾何学形態黄金比に魅了された人である。作品の中には幾何学の形の中に見出された美がデザインされています。黄金比とは人間が最も美しいと感じる比率で、 $(A+B)/A = A/B$ が成立する場合の比。近似値は1:1.618、約5:8。ギリシア文字の ϕ （ファイ）で表さる。パルテノン神殿建設時にペイディアスが初めて使ったと言われています。Apple のロゴやサグラダファミリア、モナリザ、ミロのヴィーナス、ハガキ、オウムガイの渦巻きなど、平面の物だけでなく立体物もあり、現在でも多く使われている。ル・コルビュジエはこの黄金比から独自の美の基準「モデュロール」を生み出した。



サヴォア邸

ピロティ



平和記念資料館

「ピロティ」は、現在ではよく駐車場として利用されることが多い建築方法で、独立柱で建物を持ち上げることで1階部分の空間を大地から解放し、屋外なのに建物の下部ということで、中にいるのに領域を感じることができる空間になっている。

「自由な平面」は、構造上の壁が必要なくなったので壁を無くし、従来の壁で囲まれた部屋を間仕切りのない流動的な空間にした。現代では普通のことだが、それまでは組積造を主体としていたので、平面に構造的な規制がかかっていた。

屋上庭園



MIYASHITA PARK

「屋上庭園」は、伝統的な屋根の代わりに、屋上を1つの地面として活用する手法。現在ではMIYASHITA PARKのような商業施設に多く見られる。屋上を庭園にすることで、都心のビル型建築にも緑を取り入れる頃ができる。

水平連続窓



サヴォア邸

「水平連続窓」は、それまでの組積造では必然だった縦型の窓を水平に連続した窓に作り変え、空間に均等に光が入るようにした。光だけでなく、開放感があり、縁を取り込み、景色をそのまま楽しむことができる。

「自由な立面」は外壁を構造から解放して、自由な場所に自由な開口部を開けることである。これにより建築の外観をどの面から見ても機能的にもデザインの的にも自由に設計することが可能になった。

このような建築方法を用いたものをモダニズム建築と言い、機能的、合理的な造形理念の建築となっている。モダニズム建築は19世紀以前の建築を否定し、工業生産による材料（鉄やコンクリート、ガラスなど）を用いた。ル・コルビュジエはフランクロイド・ライト、ミース・ファンデル・ローエに並ぶ近代建築の三大巨匠である。



ライト

ミース

コルビュジエ

東京芸術学校を卒業後は商工省の水谷良一に誘われ、日本輸出工芸連合会の嘱託になった。商工省は現在の経済産業省であり、商、工、鉱業、地質、度量衡、交易などを管轄していた。その時に、輸出工芸指導官として来日していたシャルロット・ペリアンの日本視察に同行した。



屋根裏のバー

ル・コルビュジエのアトリエを退所後は、ル・コルビュジエのアトリエと一緒に働いていた坂倉準三の誘いで、日本の商工省に輸出工芸指導の装飾美術顧問として招聘され来日した。ナチス・ドイツのフランス侵攻でパリが陥落する最中に来日することは坂倉準三に絶大な信頼があったと考えられる。のちに、坂倉準三は在仏日本大使公邸を設計し、シャルロット・ペリアンが内装を行った。



シャルロット・ペリアンはフランスの建築家だ。父は紳士服の裁断、母は婦人服の仕立てを生業にしていた家庭に育ったため、幼い頃からさまざまな素材に囲まれて育った。パリの装飾美術連合学校を卒業後、自らのアトリエを設立し、サロン・ドートンヌに出展した。サロン・ドートンヌとは、毎年秋にパリで開催される展覧会で、ル・サロンを運営するフランス芸術家協会と国民美術協会の保守派に対抗し創立された。そのサロン・ドートンヌに出展した「屋根裏のバー」が社会的に評価を得て、これがきっかけでル・コルビュジエのアトリエで働くことになった。



シャルロット・ペリアンがル・コルビュジエとその従兄弟のピエール・ジャンヌレと共同デザインした椅子がある。今でもなお多くの人を魅了し続けている「LCシリーズ」だ。

LC1



「LC1 スリングチェア」は、バスキュランチェアとも呼ばれ、20世紀に作られた椅子の中でマスターピースの1つに数えられる名品でニューヨーク近代美術館にも所蔵されている。背もたれが姿勢に応じて動くのが特徴で、安定感のある座り心地になっている。アームはフレームに厚革をかけただけのシンプルな作りになっており、装飾をなくし機能性を追求した作品となっている。

LC3



「LC 3 ソファ」は、「LC2 ソファ」から派生したシングルクッションシリーズである。LC2 より幅と奥行きが大きくなり、逆に高さや座高は低くデザインされている。また、片側だけアームをつけた「カウチ」はシャルロット・ペリアンのスケッチを参考に開発された。片側だけアームをつけたり、アームをなくすことで連結することが可能になり、1人用だった「LC2」と違い2人以上で座ることができるようになった。

LC2



「LC2 ソファ・オットマン」は、グランコンフォールとも呼ばれ、最小の構成で最大の快適性を実現することを目的としてデザインされたソファ。スチールパイプのフレームに背、座、アームのクッションを落とし込んでいくという簡単なデザインだが、永く愛され続けている名作。これもニューヨーク近代美術館に所蔵されている。

LC4



「LC4 シェーズロング」は、サロン・ドートンヌで発表された寝椅子である。ル・コルビュジエは「休養のための機械」と呼んだ。身体の線に沿って綿密にデザインされた背のカーブと、弓形のパイプをずらすことによって寝る角度を自由に変えることができ、素晴らしい座り心地をもたらす。独創的かつ革新的でありながら優美なボディラインを持つこの作品は、80年以上経った現在でも世界一有名な寝椅子と言われ、20世紀を代表するマスターピースの1つである。これもニューヨーク近代美術館に所蔵されている。

柳宗理は、第二次世界大戦中に坂倉準三建築研究所の所員となった。しかし、軍に所属しなければならなくなり、陸軍報道宣伝班員としてフィリピンに赴いた。戦後、フィリピンから帰国し、インダストリアルデザインの研究を始め、「柳インダストリアルデザイン研究所」を設立した。数々のコンペティションで賞を受賞し、その賞金で「財団法人柳工業デザイン研究会」へ組織を改めた。



1953年、イタリアで行われるデザインの国際展覧会「第10回ミラノ・トリエンナーレ」への招待状が日本に届いた。それを機に、丹下健三や岡本太郎、坂倉準三、シャルロット・ペリアンなどとともに「国際デザインコミッティー」を創設した。「日本デザインコミッティー」と改称された現在もお活動が続けられている。日本デザインコミッティーは、「美術とデザインと建築は、時代の良き形を追い求める人間活動の、互いに切り離せぬ構成要素であり、孤立した文化領域、互いに対立する活動とみなされがちだが、専門と分化は、人類文明のトータル

当初よりデザインする際は使い手の視点に立って、手で模型を作りながら考える手法を続け、日々の暮らしを豊かにし、長く使い続けられるものを作ること理念としている。また、デザインする際は、まず紙で簡単な模型を作り、だんだんイメージする形に近づけていき、模型の精度を高め、自ら使って確かめる。これがデザインの発想に有効として現在でも続けられている。

な進歩を前提としてのみ是認されよう。我々は相互の無理解、先入見、専門家が陥りがちの独断を排斥する。建築家とデザイナーと美術家は、汎地球的な規模における人類文明のため、協力を重ねなければならない必要性を、改めてここに確認する」と創立メンバーの1人の勝見勝が述べており、これが発足理念である。そして、さまざまな領域、立場の人々が集まり、「グッド・デザインの啓蒙」を展開した。現在は松屋銀座の7階に拠点を構え、日本デザインコミッティーのメンバーによってセレクトされは作品が展示、販売されている。



1955年からは、金沢美術工芸大学の産業美術学科号業デザイン専任教授に就任し、自らデザインするだけでなく、デザインの将来を担う若者たちへの教育にも熱心に取り組んだ。それから約50年間教鞭をとり続けた。その縁で、金沢美術工芸大学の附置施設として柳宗理記念デザイン研究所が設立された。柳宗理の作品をはじめとするデザイン関係資料約7000点余りが財団法人柳工業デザイン研究所より寄託されている。柳宗理記念デザイン研究所には、作品や空間を通して柳宗理のデザインにおける考え、姿勢を知る常設展示室がある。インテリアショールームのような空間で、直にモノを見て、触れてモノと対話して欲しいと考え、キャプションや説明文は一切用意されていない。余計な知識や先入観なしに、無心でモノに向き合って、自らの眼で素直に美を感じ取ってもらうことを大切にしている。

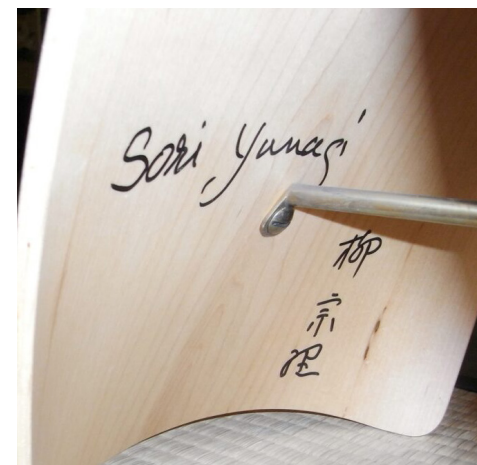
開所時間：午前9時30分から午後5時
休館日：毎週月曜（但し月曜が祝日のときは開所）
入所料：無料
所在地：〒920-0902 石川県金沢市尾張町2丁目12番1号
電話番号：076-201-8003
FAX 番号：076-201-8004
アクセス
ふらっとバス
金沢駅東口11番バスのりばから
金沢ふらっとバス（此花ルート）
彦三緑地下車 徒歩5分
北鉄バス 金沢駅東口3番バスのりばから
城下まち金沢周遊バス 右回り 橋場町（金城楼前）下車 徒歩3分
広坂・21世紀美術館バス停から
城下まち金沢周遊バス 左回り 橋場町（金城楼向い）下車 徒歩3分





柳宗理は紙を切る、折る、曲げるといった手遊びから、さまざまな形を考えるうちに、これは椅子になるのではないかと思いついた。それから、当時の日本ではほとんど知られていなかった成形合板技術だったが、アメリカのデザイナー、チャールズ&レイ・イームズがデザインした、戦地で足を怪我した兵士のための添え木（レッグ・スプリント）で存在を知っていたため、成形合板に着目した。合板に曲げを加えることで強度が増すことに気づき、座面と脚が一体化した2枚の合板を金具で繋ぐという「バタフライstuhl」の形を思いついた。東北で高周波による成形合板技術の開発が進んでいることを知り、仙台の産業工芸試験所の東北支社で、当時成形後合板を研究していた技術者の乾三郎とともに約3年の歳月をかけて「バタフライstuhl」が完成した。

当初の「バタフライstuhl」には、脚の底面が平らな和室向けの「畳摺りタイプ」と、欧米型住宅の板の間抜けの「4点支持タイプ」の2通りがあった。また、「バタフライstuhl」は一度だけモデルチェンジしている。初期の脚の形状は直線的に伸びているが、1958年からはゆるやかなカーブを描くようなデザインになった。1965年には、シャルロット・ペリアンからのオーダーで、通常よりもひと回り大きいサイズの「バタフライstuhl」を開発した。主に輸出用だったが、国内では国立近代美術館に当時の什器として納められている。柳宗理は常に新しい素材や技術の研究にも取り組んでいたため、1970年にはアクリルバージョンの「バタフライstuhl」が誕生した。強度を持たせるために厚さ10mmのアクリル板を使って製造し、クリア、レッド、ブルー、グレーの4色が生産された。





1964年には東京オリンピックのトーチホルダーは柳宗理自ら石膏ろくろを引いてデザインした。トーチ内部の仕組みや構造はほとんど決まっていたので、外形とトーチの上面の文字、トーチを入れるパッケージをデザインした。



1972年には札幌オリンピックで聖火台とトーチホルダーをデザインした。聖火台は、富山県高岡の老舗銅器鋳物メーカー梶原製作所で鋳造された。柳宗理は金沢美術工芸大学で作った原寸の石膏型を持ち込んだ。表面は金色で仕上げられており、現在でも、札幌・真駒内オープンスタジアムで輝いている。



ステンレスカトラリー



柳宗理が「日本人のためのカトラリー」のデザインを始めた。そして、その素材として選んだのがステンレス。ステンレスは頑丈にできていて壊れにくい、錆びにくく手入れが簡単なので長く使うことができる。

黒柄カトラリー



「黒柄カトラリー」は、「絶対にどこからも真似されない真似出来ないデザインをお願いしたい」と依頼されたところから始まった。柄は積層強化木使っている。積層強化木は、合成樹脂を木材の薄板に浸透させ、これを何枚も重ねて高圧で加熱圧縮して作られる。木の繊維と合成樹脂が結合し、高い硬度と強靱性を持ち、通常の本材の劣化問題を解決した。これを柄にするアイデアは多くの課題があったが、工場の技術者や職人たちと試行錯誤を繰り返して作った。ステンレスの皿部と積層材の柄部の継ぎ目は、一体の形状であるかのように段差がなく流れるような美しい形になった。しかし、これを製作するには高い技術を持ったわずかな職人しかできなかったため、非常に高価なものになった。



引用・参考文献

<https://yanagi-design.or.jp>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/柳宗理>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/柳宗悦>

[https://ja.wikipedia.org/wiki/東京芸術大学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%B7%E8%A1%8C%E5%A0%B4)

[https://ja.wikipedia.org/wiki/ バウハウス](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AC%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%AB%E3%83%B3)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/水谷武彦>

[https://ja.wikipedia.org/wiki/ ル・コルビュジエ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%BB%E3%83%B3%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%AB%E3%83%8A)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/商工省>

[https://ja.wikipedia.org/wiki/ シャルロット・ペリアン](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%BB%E3%83%A9%E3%83%B4%E3%83%AB%E3%83%86%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%AA)

<https://allabout.co.jp/gm/gc/389645/2/>

<https://kenchikuiroiro.com/building/kindaikennchiku5/>

<https://we-ll.com/blogs/knowledge/designer-lecorbusier>

<https://www.cassina-ixc.jp/shop/g/glc1/>

<https://www.cassina-ixc.jp/shop/g/glc2/>

<https://www.cassina-ixc.jp/shop/g/glc3/>

<https://www.cassina-ixc.jp/shop/g/glc4/>

<https://www.kanazawa-bidai.ac.jp/yanagi/>

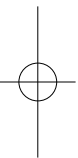
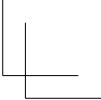
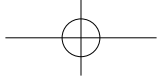
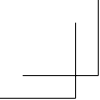
<https://www.10plus1.jp/monthly/2009/10/issue1.php>

https://kagu.tokyo/entry/perriand_japan200309

<https://allabout.co.jp/matome/cl000000014396/>

https://kagu.tokyo/entry/sori_yanagi_2211

<https://www.panorama-journey.com/panoramas/2006/07/seikada.html>



YANAGI SORI

